

## 曾孟樸の初期翻訳(下)

樽本照雄

### 2 ユゴー「九十三年」について

曾孟樸の漢訳大デュマについて、復習しておこう。

彼は、大デュマ「王妃マルゴ」を翻訳してふたつの題名をつけた。「馬哥王后佚史」と「血婚哀史」である。前者は、1908年の雑誌『小説林』に掲載された。単行本も1908年に出たという。ところが、その4年後、同じ「王妃マルゴ」が題名を「血婚哀史」にかえて新聞に連載されている。

考えてみれば、今まで研究者は曾孟樸が漢訳した作品名をあげるだけだった。その翻訳について、郭延礼は「かなり原著に忠実であり」と判定する。しかし、原文と孟樸訳を比較対照した具体例を示してはいない。結論があるだけ。

だれも検討を行っていない、とはいわない。だが、私が見るところ、その翻訳内容を検討する過程が明らかにされたことはない。こう説明せざるをえないは残念なことだ。

私は、「王妃マルゴ」について、原文と孟樸の漢訳をつきあわせてみた。その結果は、想像もしなかったものだ。いわれているほど原文に忠実ではないのである。

「忠実」といっても指す内容が研究者全員で一致するわけではない。それは理解しているつもりだ。

清末民初という時代を前提にしていることは説明の必要もないだろう。私の考える比較的忠実な翻訳とは、こうである。

原作の大筋を変更しない。登場する人物名、地名など固有名詞は、できるだけ省略しないでほしい。音訳でいい。名前を中国人風にかえるのは許容範囲内だ。

加筆、削除もできるだけひかえる（程度問題だが）。これくらいだ。常識的といっていいたろう。そうであれば、ほぼ忠実な翻訳であると判定しても大方の賛同を得られるのではなかろうか。

全訳が望ましい。だが、時代背景にもよるだろう。全訳でなければならない、と強調する考えは私にはない。いろいろな種類の翻訳が存在してもいい。日本でいう豪傑訳、翻案に近い翻訳はどうか。出てきてしまったものはしかたがない。その存在を否定したところで過去の状況が変化するわけではないからだ。

私が考える翻訳研究は、次のようになる。どういう翻訳があって、それらは原作をどのように受け止めたか。これを文章に沿って比較対照しながら具体的に検討する。それ以外にやりようがない。前にも書いたが、清末民初の翻訳作品について私は結論を急がない。その理由は、個々の作品の吟味が必要だと考えるからだ。

検討の要点には、その翻訳が原作に忠実かどうかを見ることも含まれている。私が重点をおくのは、翻訳状況を冷静に観察することだ。結果として判定することになろうとも、そのことのみが主要な目的ではない。

曾孟樸は、「王妃マルゴ」を翻訳して（題名は「馬哥王后佚史」と「血婚哀史」）中国の章回小説風に少し変形した。フランス語原文には、もともとありはしない書き方だ。郭延礼にいわせれば、これも含めて「かなり原著に忠実であり」ということになるのだろうか。その点について私は、疑問を感じる。

それとは別の問題が、曾孟樸訳にはある。例の文言白話問題である。

曾孟樸は、白話による翻訳を主張した。しかも、他人にそうすることを勧めてもいる。文言で漢訳して著名な林紘に向かって、面会した際に直接そう提案したのだった。孟樸自身が当時の会談模様を公表している。胡適へあてた書簡にそう書いた。本当にあったことだろう。

胡適といえば、文学革命当時、林紘を批判する側にいた。胡適と曾孟樸は、両者ともに林紘批判で一致していたといえることができる。

それ以来、白話による翻訳が、曾孟樸の変わらぬ主張だということになっている。普通に受け取れば、彼はその主張どおりに自らが実践して白話で翻訳した。少なくともそう考えられてきた。これについて研究者が異議をとなえたことはない。事実、「王妃マルゴ」は白話による漢訳だった。

では、別の作品でもそうなのだろうか。ほかならぬ『時報』に孟樸はユゴー「九十三年」の漢訳を連載している。時期的にいえば、「王妃マルゴ〔血婚哀史〕」の

直前、すなわち同じ1912年だ。この曾孟樸訳「九十三年」を見てみよう。

曾孟樸訳ユゴー「九十三年」

本稿で検討するのは、『時報』に掲載された曾孟樸の翻訳だ。

曾孟樸訳ユゴー「九十三年」に関して、私は目録初版358頁において以下のように示した。新編増補版〔第3版〕でも記述の内容に変更はない。

J476\* 九十三年（法国革命外史）

（法）囂俄著 東亜病夫（曾孟樸）訳

『時報』1912.4.13-6.14

VICTOR HUGO“QUATRE-VINGT-TREIZE”1874

上記の連載時期はその一部分。開始と終了は不明

上に示した「『時報』1912.4.13-6.14」は、私が所有する実物の『時報』にもとづいている\*15。

「九十三年」の『時報』連載状況は、次のとおり。1912年2月21日に連載を開始し、同年9月14日に終了した。ついでにいえば、1日休んで9月16日から「血婚哀史」の連載が続いている。別のことばでいえば、1912年の『時報』には、ほぼ連日のように東亜病夫（曾孟樸）の翻訳が掲載されていた。

単行本は、有正書局（1913.10）および上海・真美善書店（1931.6）より刊行されたという。私は、いずれも未見\*16。

新聞連載の曾孟樸訳は、章の番号のみを示している。フランス語原文にほどこされた題目は翻訳されていない。

書き出しを見てみる。フランス語原書はガリマール Gallimard 1979年版を使用した。日本語訳は、ヴィクトル・ユゴー著、榊原晃三訳『九十三年』上下（潮出版社 上1969.11.25 / 1978.4.10八刷、下1970.2.1 / 1978.4.10六刷）から該当する部分を引用する。

*Le bois de la Saudraie*

Dans les derniers jours de mai 1793, un des bataillon parisiens amenés en Bretagne par Santerre fouillait le redoutable bois de la Saudraie en Astillé. On

n'était pas plus de trois cents, car le bataillon était décimé par cette rude guerre. C'était l'époque où, après l'Argonne, Jemmapes et Valmy, du premier bataillon de Paris, qui était de six cents volontaires, il restait vingt-sept hommes, du deuxième trente-trois, et du troisième cinquante-sept. Temps des luttes épiques. p.31

### ラ・ソードレの森

一七九三年五月末のことだった。サンテール將軍にひきいられ、ブルターニュ地方へ派遣されたパリの歩兵一個大隊は、アスティエ地方の、あのおそろしいソードレの森の中で敵をさがし求めていた。一個大隊といっても、この隊はあのはげしい戦いで大半の兵士を失い、三百人ほどが残っているだけだった。アルゴンヌ、ジェマップ、ヴァルミの各戦闘ののち、六百人の義勇兵からなっていたパリ第一大隊は二十七人に、第二大隊は三十三人に、そして第三大隊は五十七人にまでへっていた。それほど凄惨な戦いの時代だったのだ。13頁

【曾孟樸】當一千七百九十三年五月杪。有巴黎民軍一隊桑坦爾（巴黎麦酒商。攻文台時之師団長）率之往攻勃蘭峒者經沙達蘭森林。其時部下健兒為數不及三百。蓋適經蘭哥瑞麥樊密三度劇戰之後。僅留此劫餘之殘隊鼓勇而進。2.21付  
1793年5月末だった。巴黎の革命軍1隊はサンテール（パリの麦酒商人。ヴァンデ攻撃時の師団長）に率いられてブルターニュに派遣され、ソードレの森を通った。その時、部下の勇士は300人にもならず、アルゴンヌ、ジェマップ、ヴァルミの激戦を経てわずかに残ったもので勇気をふるって進んでいた。

サンテール將軍について、曾孟樸は原文にはない「パリの麦酒商人。ヴァンデ攻撃時の師団長」を補足説明している。「パリの麦酒商人」は何によったのか不明だ。親切であるようだが、ここの説明はなくてもかまわない。激戦のために兵士が減少している人数まではいちいち翻訳せず、「三百」で代表させた。

まず驚く。この漢訳は文言であるからだ。曾孟樸は、白話による翻訳を主張していたのではなかったのか。文言を使用する林紘に、白話での翻訳を勧めたのは有名な話だ。まさか、その彼が文言で翻訳をしていたとは思えない。

漢訳「王妃マルゴ」は白話だ。すると、曾孟樸は当時白話と文言の両方を使用して翻訳していたことになる。いま目の前にあるのは、文言なのだ。従来からの見方を修正する必要がでてくる。

曾孟樸の翻訳は原文に忠実だ、といういわゆる「定説」が私の頭から離れない。

つい、そのつもりで孟樸訳を見てしまう。すると、原文にそれほど忠実ではない箇所があって気になる。

たとえば、部隊と行動を共にしている従軍物売り女（名前はウザルド〔呉散徳〕）がいる。彼女は、幼子3人をかかえた女性がいるのを見つけた。戦場にいる不審人物あつかいだからあれこれと質問がなされる。どこの人間だ、食物も持たず幼子となぜこんな場所にいるのか、王党か共和党か、などなど。その答えは、じいさまは新教徒で、刑罰に送られた。亭主の父親は縛り首になり、亭主は戦争に行ったまま。それを聞いていたある兵士が叫ぶ。領主からひどい目にあわされながら、その領主のための戦争に参加するという無知さ加減に怒るのだ。

que de voir des iroquois de la Chine qui ont eu leur beau-père estropié par le seigneur, leur grand-père galérien par le curé et leur père pendu par le roi, et qui se battent, nom d'un petit bonhomme! p.41

わたしに言わせりゃ、まるきり、シナの無知な百姓みたいでさあ。自分のおやじは領主にかたわものにされ、じいさまは司祭のために漕徒刑にやられちゃう、しゅうとは王の命令でしばり首になったってのに、この女の亭主ときたら、いったいなんてこった！29頁

日本語訳では「シナの無知な百姓みたい des iroquois de la Chine」としてある。この iroquois は、辞書を見れば北米インディアンのイロクオイ族だという。現代漢語訳の該当箇所を見ると「これらの中国の赤色人種〔這些中国的紅種人〕」となっている。これでは理解できないと考えてだろう、訳者の注がほどこされる。「近衛兵が怒って話すのは少しばかりしどろもどろである。いわゆる「中国の赤色人種」うんぬんは、「これらの奇怪な田舎者」という意味」\*<sup>17</sup>とある。

罵りことばに利用された中国と北米インディアンだ。ユゴーの意識のなかで中国がそういう位置にあったのか、当時の大衆の考えが反映しているだけなのかわからない。だが、一目瞭然だろう。ここに出てくる中国によい意味を含ませてはいない。曾孟樸は、その箇所に出会ってどうしたか。結局のところあっさり無視した。この部分について彼は原文に「忠実」である必要を認めなかった。

手元にある1912年『時報』原紙掲載の状況は、次のとおり。「/」につづく部分は、参考までにつけ加える。



『時報』1912.4.13 煙をながめるテルマルク 服装は乞食には見えない。挿し絵全般についていえることは、少しはずれている。

1912年

4月13日 第20章 / 第1部第4編 7 ゆるすな 助命するな PAS DE GRACE. PAS DE QUARTIER.

14日 同上

15日 同上

16日 同上 巻1已完

17日 2巻第1章 / 第2部第1編 1 そのころのパリの通り LES RUES DE PARIS DANS CE TEMPS-LA

6月5日 第4、5章 / 第3部第2編 6 なおった胸、いたむ心 SEIN GUÉRI, COEUR SAIGNANT

6日 第5章

7日 第6章 / 第3部第2編 7 真理の両極 LES DEUX PÔLES DU VRAI

8日 同上

9日 同上

10日 同上

11日 第7章 / 第3部第2編 8 悲しむ母 DOLOROSA

14日 第8章

曾孟樸の漢訳を見てみよう。

ヴァンデ軍の総指揮者ラントナック侯爵は、海戦が始まる直前に逃れて上陸した。ひとりでいるところを、偶然乞食のテルマルクに助けられる。乞食とわかれた侯爵は、敵の一隊に囲まれたと思った。ところが、遭遇したのは味方のヴァンデ軍だったのだ。侯爵は、その場所すなわちエルブ=アン=パイユにおける共和政府軍（赤帽大隊）との戦いに決着をつけた。集落を焼き払い、捕虜を銃殺するよう命令した。そのなかでいた（小説冒頭に出てくる）従軍物売り女のふたりも銃殺される。ただ、残された子ども3人は人質として連れて行くことに決めて移動した。

一方、侯爵とわかれたテルマルクは、西の方向にひとすじの煙を見つけた。侯爵たちが去ったあとの同じ集落であることを読者は理解するはずだ。煙を見つけるまでのテルマルクである。

【曾孟樸】戴麦客自与侯爵在達尼分路後。乃独行入山谷深处。徘徊於濃陰密箐之下。忽行忽止。或採草芽食之。或掬飲流泉。或向陽曝其破衲。有時俯首。謂為沈思。不如謂為遐想。盖沈思有目的。而遐想則無目的也。有時拳首。若聽遠处之人声。其寔非聽人声乃聽鳥啼耳。

彼年老而步遲。不能遠去。已自承于侯爵前。度此漫遊當不出一里範圍迨其曳杖言歸。已在下午矣。歸途時。行經一高曠之林丘。其地可以遠眺。西極海濱。無一物障。乃此時忽於無障之中有絕大之障眼物。則冲天之濃煙也。戴麦客乃大疑。4.13付

テルマルクは侯爵とタニスでわかれたあと、ひとりで谷の奥まったところにはいりこんだ。木陰竹林のもとを徘徊し、行ったり止まったり、草の芽をとって食べ、流れるわき水をすくって飲み、太陽にむけてそのぼろ着をさらした。時にうなだれ、物思いに沈むというよりも夢想しているといったところだ。物思いに沈むには目的があるが、夢想であれば目的はないのである。時に頭をあげ遠くの話し声を聞くかのようなのだが、その実、話し声ではなく鳥が鳴くのをきいている。

彼は年老い歩みも遅い。遠くに行くことはできない。侯爵の前でそのことは自分ですでに認めている。このぶらつきも1里の範囲を出てはいないはずだが、

散歩から帰ってみれば、すでに午後であった。帰るとき高く広々とした丘を通ったが、そこから遠くを眺めることができ西は海辺で、さえぎる物はなにもなかった。そのとき何もさえぎるものがないなかに目をさえぎる大きなものがある。空に向かう濃い煙であった。テルマルクは大いにいびかった。

改行するという方法を採用したのは新しいといえようか。文言文では、普通そのように書くのはあまり見かけない。同じ『時報』に掲載した白話訳「王妃マルゴ [血婚哀史]」でも改行はしていない。表記法についても試行錯誤のひとつだということだろう。

フランス語原文では、どうなっているのか。日本語訳とともに引用して示す。

Pendant que ceci se passait près de Tanis, le mendiant s'en était allé vers Crollon. Il s'était enfoncé dans les ravins, sous les vastes feuillées sourdes, inattentif à tout et attentif à rien, comme il l'avait dit lui-même, rêveur plutôt que pensif, car le pensif a un but et le rêveur n'en a pas, errant, rôdant, s'arrêtant, mangeant çà et là une pousse d'oseille sauvage, buvant aux sources, dressant la tête par moments à des fracas lointains, puis rentrant dans l'éblouissante fascination de la nature, offrant ses haillons au soleil, entendant peut-être le bruit des hommes, mais écoutant le chant des oiseaux.

Il était vieux et lent; il ne pouvait aller loin; comme il l'avait dit au marquis de Lantenac, un quart de lieue le fatiguait; il fit un court circuit vers la Croix-Avranchin, et le soir était venu quand il s'en retourna.

Un peu au delà de Macey, le sentier qu'il suivait le conduisit sur une sorte de point culminant dégagé d'arbres, d'où l'on voit de très loin et d'où l'on découvre tout l'horizon de l'ouest jusqu'à la mer.

Une fumée appela son attention. p.132

こうしたことがタニスの近くでおこっているあいだに、例の乞食はクロロンのほうへ向かって歩いていた。彼は暗く広大な木の葉かげにおおわれたくぼ地に踏みこんでいた。前にも自分で言っていたように、一切のものに無関心、なにごとにも目を向けないといった顔つきだった。なにかを考えこんでいるというよりも、ただ夢想しているといったほうがよかった。つまり、考えこむとい

うことには目的があるが、夢想というものには目的がないからだ。彼は、さまよったり、うろついたり、立ちどまったり、あちこちで野生のすかんぼの若芽をたべてみたり、泉の水をのんでみたり、ときには頭をあげて、遠くのほうから聞こえる物音に耳をかたむけてみたりしていた。あるいは、大自然のまぶしい魅力にわれを忘れたり、ぼろ着を日光にあててみたり、おそらく人間どもが立てる物音もきいているのだろうが、そんなものよりも小鳥の歌にじっと耳をかたむけてみたりしていた。

彼は年をとっていたから足もおそかった。遠くへいくことはできなかった。前に彼自身、ラントナック侯爵に言ったとおり、十町もいくと疲れてしまった。クロワ=ザヴランシャンのほうをほんの少しまわってきたのだが、ねぐらへ引き返したときは、もう夕方だった。

マセをちょっとすぎたあたりで、彼が歩いてきた道は、木々がはえていない小高い丘みたいなどころにでる。そこからは、はるか遠くまで見わたされ、地平線を西から海のほうまでずっと見はるかすことができた。

一すじの煙が彼の注意をひきつけた。157-158頁

冒頭の「こうしたことがタニスの近くで」について説明しておく。「タニスの近く」にあるエルブ=アン=パイユという集落での戦闘を指している。前述のとおり集落の焼き払いと捕虜の銃殺を命令したのは、ラントナック侯爵だった。

出てくる地名で曾孟樸が採用したのは、タニスだけだ。クロロン、クロワ=ザヴランシャン、マセなどを省略したのは、話の筋には関係しないとの判断だろう。

長さについても翻訳するときにはやっかいだ。国により時代によりそれぞれが異なる。1リユーの4分の1 un quart de lieue だから約1キロメートルだ。日本語訳の「十町」は、ほぼそれに当る。ただし、曾孟樸が漢訳した「一里」は、その半分にしかない。

テルマルクがねぐらにもどったのは夕方だ。孟樸訳の「午後[下午]」とは、少しずれる。

上の部分についていえば、曾孟樸の翻訳は、原文にほぼ忠実だといえる。少しの異なった部分もあるが、とつけ加えよう。

林訳ユゴーと比較しながら

林紓は、毛文鍾と共同して「九十三年」を漢訳している。『双雄義死録』（上海・商務印書館1921.10 説部叢書第4集第12編）というのがそれだ。

別稿で林紓らが使用した底本について説明した。林訳『双雄義死録』は、主として英語のメギー要約版にもとづき、全訳であるベネディクト版から部分的に取り込んで成立した。これが諸版を比較検討して私が得た一応の結論だ。「一応の」とつけるのには理由がある。メギー要約版以外の要約版があって、それを林紓らは底本にした可能性を私は否定していないからだ。ただ、私はそれを探したが見つかることができなかった。

曾孟樸訳と同じ箇所のエピソードを見てみよう。

【林訳】此時太爾馬方向科老郎林間行乞。以年高行緩。日暮尚未及其宿處。行及高原。西望忽見一縷煙紋。38-39頁

このとき、テルマルクはクロロンの林へ向かって物ごいに行った。彼は年老いていたので歩みは遅い。日暮れてもなおねぐらにはつかない。高原に行き着いた。西をながめればふと一筋の煙が見える。

物思いに沈む、夢想する、ぼろ着を日光にあてる、水を飲むなどの道中描写は省略している。それだけを見て、林紓が勝手に原文を省略したと即断してはならない。なぜなら、林紓らが底本にしたメギー要約版がそうになっているからだ。

【メギー要約版】 WHILE all this was passing near Tanis, the beggar had gone toward Crollon. He was old, and moved slowly; he could not walk far. The path he was following led to a point bare of trees, from which one could see very far, taking in the whole stretch of the western horizon to the sea. A column of smoke attracted his attention. p.54

こういったことがタニスの近くでおこっているあいだ、その乞食はクロロンのほうへ向かって行った。彼は年老いていたので動きは遅く、遠くへ歩くことはできなかった。彼の通った道は木のない場所につづいており、そこからは遠くまで見通せ、西の地平線から海へのすべてを見わたすことができた。まっすぐ立ちのぼる煙が彼の注意を引いた。

メギーが乞食 the beggar と訳した箇所を、林紘らはテルマルク [太爾馬] の名前を出した。メギー要約版は、テルマルクのねぐらについては省略している。林訳は、メギー要約版そのままではない。林紘らは要約版にない箇所を、ベネディクト版から取り入れた、と私がいう理由である。手間のかかる作業だといわなければならない。

エルブ=アン=パイユ Herbe-en-Pail が、その燃える集落の名称だ。曾孟樸は、それを「蘭朋(荘)」と訳す。林紘は、「魯ト」とする。

集落には兵士の死体が大量に残されていた。倒れている女のひとは銃殺されている。もうひとは重傷だがまだ息があった。村人ふたりが担架をつくり女を運び出す。テルマルクがそれに付き添う。道中、村人ふたりが会話をする。まず、フランス語原文を示す。

Tout en cheminant, les deux paysans causaient, et, par-dessus la femme sanglante dont la lune éclairait la face pâle, ils échangeaient des exclamations effarées.

- Tout tuer!
- Tout brûler!
- Ah! monseigneur Dieu! est-ce qu'on va être comme ça à présent?
- C'est ce grand homme vieux qui l'a voulu.
- Oui,c'est lui qui commandait.
- Je ne l'ai pas vu quand on a fusillé . Est-ce qu'il était là?
- Non. Il était parti. Mais c'est égal, tout s'est fait par son commandement.
- Alors, c'est lui qui a tout fait.
- Il avait dit: Tuez! brûlez! pas de quartier!
- C'est un marquis?
- Oui, puisque c'est notre marquis.
- Comment s'appelle-t-il donc déjà?
- C'est monsieur de Lantenac.

Tellmarch leva les yeux au ciel et murmura entre ses dents:

- Si j'avais su! pp.137-138

歩きながら、二人の百姓は話しあっていた。そして、月の光に青白い顔を照

らされている血にまみれた女の上で、おびえたような叫びをかわしあっていた。

「みんな殺しゃがった！」

「みんなやいてしまやがった！」

「ああ！神さま！これからも、きょうみてえな日がつづくんでございますか？」

「あんなことをさせよって計画したのは、あの背の高いじいさんだぜ」

「そうだ、そうだ、あのじいさんが命令したんだ」

「銃殺がおこなわれてるときゃ、あいつのすがたは見かけなかったぜ。あそこにいたのかいな？」

「いや、もうでかけちまったあとだった。でもよ、そんなこたあ、同じこつた。なにもかも、あいつの命令でやられたんだからな」

「それじゃ、なにもかも、あいつのしわざだったのか？」

「あいつは、『殺せ！やきはらえ！敵を一兵たりとも助命するな！』って言うってたぜ」

「ありゃ、侯爵か？」

「そうさ。おれたちの侯爵さ」

「もとは、なんていう名前だったんだ？」

「ラントナックさまさ」

すると、テルマルクが目を空のほうに向けて、口の中でつぶやいた。

「おれがそれを知ってたらな！」164-165頁

テルマルクが助けた侯爵その人が、焼き払い銃殺するように命令した。犠牲になった者のひとりを選んでい。彼が侯爵を助けなかったならば、この虐殺は行なわれなかったかもしれない。その思いが、最終行の「おれがそれを知ってたらな！」という台詞に集約されている。

フランス語原文は、会話であることがわかるように記号を使い、さらに改行している。曾孟樸は改行はせず、「言う、言った[曰]」を使用する(白話訳の「王妃マルゴ」では「道」だった)。林紓と同じ工夫をほどこしているといえることができる。ここでは、曾孟樸訳の会話部分は改行してカッコを用いて日本語に翻訳する。

【曾孟樸】維時一輪皓月。適射此婦瀆血之面。閃閃作碧色。兩郷人則且行且作

惨呼。一人曰。全殺矣。一人曰。全焚矣。曰。噫天主果孰使我至於此極耶。曰。一老貴人欲之。可奈何。曰。然。我知之。此乃彼之命令。曰。當屠殺時。我未見之。彼果在此乎。曰。否。彼已先行。然凡此皆遵彼之命令而行。曰。然則不啻彼自為之。曰。我聞彼臨行之命令曰殺！曰焚！勿仁慈！曰。彼乃一侯爵也。曰。且為我曹之領主。曰。彼何名。曰。即冷達男先生。戴麥客聞冷達男名。忽仰面視天作微吁曰。我寧知有今日耶。4.16付

このとき、明るく輝く月が女の血にまみれた顔を照らし、きらきらと青色にそめた。ふたりの村人は歩きながら悲しんだ。

「みんな殺した」

「みんな焼いた」

「ああ。神さま。わしらをなんでこんな目に」

「年取った偉い人がそうさせたんだ。なんともな」

「そうだ。わかってるぞ。あいつの命令だ」

「殺しが行なわれているとき、あいつを見かけなかった。あそこにいたのか」

「いや、あいつは行ったあとだ。だが、みんなあいつの命令でやったんだ」

「それじゃ、あいつがやったのと同じことだったのか」

「あいつが命令したとき、「殺せ！焼け！慈悲をかけるな！」って言ったのを聞いたぞ」

「あいつは、侯爵か」

「おれたちの領主だ」

「なんていう名前だ」

「ラントナックさまさ」

テルマルクは、ラントナックの名前を耳にすると、上をむき空を見てつぶやいた。

「こんなことになろうとはな」

農民ふたりの会話は、数えれば13回ある。曾孟樸訳は、それを忠実になぞっている。記号「！」を使用しているのも、孟樸にとっては新しい試みのように見える。以上に対して、メギー要約版は、その名称の通りに少し要約している。

【メギー要約版】As they proceeded, the two peasants talked.

“It was that tall old man who ordered it to be done.”

“Yes; it was he who commanded.”

“Then it was he who did the whole.”

“He said, ‘Kill! burn, no quarter!’”

“He is a marquis.”

“Of course, since he is our marquis.”

“How is it they call him now?”

“He is Marquis de Lantenac.”

Tellemarch raised his eyes to heaven, and murmured:

“If I had known!” p.56

歩きながら、ふたりの農民は話した。

「あんなことを命令したのは、あの背の高いじじいだ」

「そうだ。あいつが命令したんだ」

「なにもかも、あいつがやったんだ」

「「殺せ！焼きはらえ！助命するな！」ってあいつは言った」

「あいつは侯爵か？」

「もちろん。おれたちの侯爵だ」

「なんていう名前だ？」

「ラントナック侯爵さ」

テルマルクが目を空に向けて、つぶやいた。

「おれがそれを知ってたらな！」

ユゴー原文を大筋でなぞりながら、会話部分のいくつか、たとえば神へ投げかけた台詞などを間引いている。

それでは、林訳はどうなっているか。こちらはふたりに甲乙を割り振る。カッコを使って会話体にして日本語訳をつける。

【林訳】行時。甲曰。上帝鑑之如此残忍之状。奈何為吾輩所見。乙曰。此均老健之將軍。発此命令。甲曰。此輩発鎗。老將軍不在其内。乙曰。然。命令実此老人所発。甲曰。彼為侯爵。乙曰。即所以轄我之人。太爾馬以面向天曰。早知

其如是者。吾何為脱彼於難。40頁

歩きながら甲が言った。

「神様がお示しになったこんなにひどい有様を、おれたちが見せられようとはな」

乙「年寄りの元気な将軍がみんな命令したんだ」

甲「あいつらが発砲したとき、あの将軍はそこにいなかったぞ」

乙「だが、命令はあのじじいが出したんだ」

甲「あいつは侯爵か」

乙「おれたちの領主だ」

テルマルクは空にむけて言った。

「そうと知っていたらな。おれはなんであいつを救ったか」

いきなり会話になる。月の光にうかぶ血にまみれた女性の顔などについてははぶいた。メギー要約版もそうになっている。

ご注目いただきたい。メギー要約版では省略した「神様」について、あるいは銃殺が行なわれているとき侯爵はすでにいなかった、などはほぼ原文通りに漢訳している。林訳を見て私が不思議に感じるのは、こういう箇所だ。林紘が勝手に想像して加筆したものではない。メギー要約版にないのだから、全訳であるベネディクト版から部分的に取り込んだと考えざるをえない。

ベネディクト版88頁から該当する部分を示す。

“Ah, my God! Is that the way things will go now?”

「ああ！神さま！今のようなことがつづくんでございますか」

“I did not see while the shooting went on. Was he there?”

「発砲が続いていたとき、見なかったぞ。あいつはそこにいたのか」

くりかえすまでもないと思うが、曾孟樸訳と林訳は、それぞれのよった底本が異なっている。表面だけを見て、林訳はユゴー原作に忠実ではないと批判するのであれば、それは間違っている。

『時報』1912年4月17日から、ひきつづいて2巻第1章がはじまる。原作では「第2部バリ」「第1編シムールダン」に該当する。すでに指摘したとおり、曾孟

樸訳には章題は書かれていない。

冒頭から訳者である曾孟樸が「吾」と名のって出てくる。ユゴー原文がどうなっているのか興味のあるところだ。まず、ユゴー原文から示そう。

On vivait en public, on mangeait sur des tables dressées devant les portes, les femmes assises sur les perrons des églises faisaient de la charpie en chantant *la Marseillaise*, le parc Monceaux et le Luxembourg étaient des champs de manoeuvre, il y avait dans tous les carrefours des armureries en plein travail, on fabriquait des mains; on n'entendait que ce mot dans toutes les bouches: *Patience. Nous sommes en révolution.* p.141

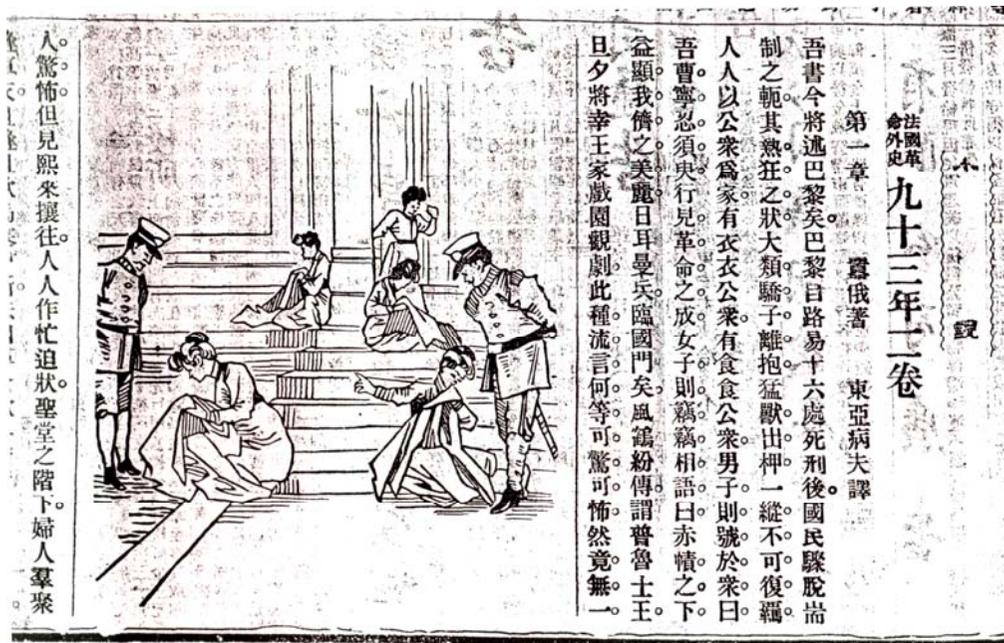
当時、パリの人びとは、みな大衆の中で生活していた。戸口の前にテーブルを持ち出して食事をしたし、女たちは教会の石段に腰をおろして、《ラ・マルセエズ》を歌いながら、麻の包帯を作っていた。モンソー公園、リュクサンブール公園は練兵場となっていたし、にぎやかな辻々にはかならず、大車輪で活動している武器工場があって、通行人の目の前で小銃を製造していた。それを見て、通行人たちも拍手を送っていた。人びとの口からきかれるのは、『なにごとまがまんしろ。今は革命中なんだから』という言葉だけだった。169頁

ユゴーは、「そのころのパリの通り」でくりひろげられていた模様を詳細に説明する。パリ市民の生活ぶりが具体的に描写されているから当時の混乱ぶりが目の前にあるかのようだ。引用した冒頭部分を見ただけでそれをうかがうことができよう。この調子で長々と続くのが原作である。

曾孟樸は、それに少しだけ加筆した。

【曾孟樸】吾書今將述巴黎矣。巴黎自路易十六処死刑後。国民驟脱專制之軛。其熱狂之狀。大類驕子離抱。猛獸出柙。一縱不可復羈。人人以公衆為家。有衣衣公衆。有食食公衆。男子則号於衆曰。吾曹寧忍須臾。行見革命之成。女子則竊竊相語曰。赤幘之下。益顯我儕之美麗。4.17付

パリのことを述べよう。パリではルイ16世を死刑にしたのち、国民は突然に専制のくびきから逃れた。その熱狂の様子は、だだっ子が懐から離れ、猛獣がオリから出たようなもので、放ってしまえばふたたび拘束することはできない。



女たちは教会の階段で

人々は大衆を家とした。衣服があれば大衆でそれを着た。食べ物があれば大衆で食べた。「おれたちはしばらくがまんするのがいいぞ。やがて革命は成功するんだ」と男はいい、女はこっそりと「赤い頭巾だときれいに見えるでしょ」と語り合った。

書き出しのルイ16世うんぬん部分が、曾孟樸による独自の説明になる。わかりやすくなったといえるかもしれない。しかし、原文にないこの箇所をどうしてもつけ加える必要があるだろうか。ここでも孟樸訳に与えられた原文に忠実という評価が背後からでてくる。加筆は、忠実な翻訳からはみ出るではないか。

女たちが教会の階段で包帯（孟樸訳では軍服〔軍衣〕）を作っている新聞挿絵をかかげる。

メギー要約版も参考までに見ておく。

【メギー要約版】PEOPLE lived in public; they ate at tables spread outside the doors; women seated on the steps of the churches made lint as they sang the “Marseillaise.”

There were gunsmiths' shops in full work; they manufactured muskets before the eyes of the passers-by, who clapped their hands in applause. The watchword on every lip was, "Patience; we are in revolution." The people smiled heroically.  
p.57

人々は大衆のなかで生活していた。戸口のそとにひろげたテーブルで食事をし、女たちは教会の石段に腰をおろして、「マルセーエズ」を歌いながら包帯を作っていた。

大車輪で活動している武器工場があって、通行人の目の前で小銃を製造していた。それを見て、通行人たちも拍手を送っていた。人びとの合い言葉は、「がまんしろ。今は革命中なんだから」だった。人々は勇ましく微笑んだ。

要約版らしく公園の名称は省略している。だが、それでも曾孟樸が加筆したのに比較すれば原文に近い。

林訳はどうかと見れば、パリの状況については、全部を削除した。

曾孟樸訳の半ばまで

手元の新聞原紙では、日付はとんで6月5日だ。ここから「第4章」に、それも終り近い箇所の話になる。ユゴー原作でいえば、第3部「ヴァンデ」第2編「三人の子ども」のなかの「6 なおった胸、いたむ心」「7 真理の両極」「8 悲しむ母」に該当する。

話の流れを簡単に紹介しておく。

老人のラントナック侯爵は、親戚の若者ゴーヴァン子爵と対立している。ゴーヴァンは、ラントナックからすれば甥の息子である。自分の後継ぎにと考えていたほどだった。そのふたりが敵対して闘っている。ラントナックは王党派であり、ゴーヴァンは共和派だ。同じ共和派のシムールダンは、元僧侶にしてゴーヴァンの家庭教師だったことがある。この3者が物語の主人公だ。重要な脇役として3人の子どもがいる。従軍物売りに発見された女が連れてきている子どもたちだ。共和政府軍に属する赤帽大隊の養子になっていた。どういうことかといえば、行き倒れていた母子4人に遭遇したのが、赤帽大隊だった。これが「九十三年」の冒頭で示される物語だ。助けられた母子は大隊と行動をとることにした。子ども3人は赤帽大隊が養育する。すなわち養子となったというわけ。

ラントナックが大量の捕虜を銃殺するように命じた箇所を思い出してほしい。エルブ=アン=パイユの集落である。その時、敗れたのは赤帽大隊で、半分が殺されていた。巻き添えにされたのが従軍物売り女であり、子どもたちはラントナックの命令で連れ去られたことも読者のご記憶であろう。乞食テルマルクは、虫の息であった母親を助け出した。時間がたち傷がほぼ癒えた母親は、子ども3人をさがしてさまよいはじめる。いくつかの戦闘が行なわれる。最終的には、いなかの城塞ラ・トゥーグルに立てこもったラントナック率いる王党派と子ども3人をめざして、母親、ゴーヴァン、シムールダンおよび赤帽大隊の残党が、全員集合するという筋書きである。

今、目の前にある曾孟樸の翻訳は、まだ物語の半ばでしかない。テルマルクに傷の手当を受ける母親の箇所あたりだ。

いくつかの戦闘のひとつで事件は起こった。ゴーヴァンがラントナックの王党軍を奇襲して勝利を収めた。ひとりの百姓兵を追いつめたところ、ゴーヴァンにむけて拳銃を発射しサーベルを振り下ろした。その瞬間、騎馬の男がふたりの間に飛び込む。馬は弾丸をうけ、男はサーベルで傷つくが、ゴーヴァンを救った。命を助けた男こそシムールダンである。ふたりは再会した。

負傷したシムールダンは、病室で会話を耳にする。ゴーヴァンと彼を狙った負傷兵との会話だ。死にたいという負傷兵にゴーヴァンは、いう。

— Tu vivras. Tu as voulu me tuer au nom du roi; je te fais grâce au nom de la république.

Une ombre passa sur le front de Cimourdain. Il eut comme un réveil en sursaut, et il murmura avec une sorte d'accablement sinistre:

— En effet, c'est un clément. p.282

「おまえは生きるのだぞ。おまえは王の名にかけておれを殺そうとした。しかし、おれは共和国の名にかけておまえをゆるしてやろう」

影がシムールダンの額をよぎった。はっととびあがって夢からさめたような心地だった。そして、一種不吉な意気消沈におそわれながら、つぶやいた。

「まったく寛大な男だ」 下冊82頁

ゴーヴァンとシムールダンは、古くからの知り合いだ。そればかりか、ゴーヴァ

ンが危機に直面したのに際し、シムールダンは自らが傷つくことを躊躇しなかった。命をかけてゴーヴァンを救った。この事件は、ふたりが親密な間柄であることを示して明確だ。殺そうとした犯人をゴーヴァンは、許そうとしている。同じ共和派ながらゴーヴァンは寛大を、シムールダンは恐怖を代表する。ふたりの姿勢が異なることをもあわせて読者に理解させようとする場面だ。

曾孟樸の漢訳を示す。

【曾孟樸】瞿文曰。汝欲死。我必生汝。汝称王名以殺我。我則称共和之名。而施恩於汝也。

薛慕丹聽至此。忽如巨雷一擊。立破其迷夢。中心戚戚。若有重憂之突压者。自語曰。馬拉言驗矣。是即仁慈也。6.5付

「お前が死にたいといっても、おれはお前を生かしてやる。お前は王の名にかけておれを殺そうとした。ならばおれは共和の名にかけてお前に恩恵を施してやる」とゴーヴァンはいった。

シムールダンはこれを聞くと、まるで雷の一撃を受けたように夢からさめた。心は悲しく、重い憂いにおそわれたかのようにつぶやいた。「マラのことは当たっている。慈悲深いことだ」

マラが説明もなく登場するから読者はとまどうのではなからうか。反乱軍捕虜を逃した指揮官はすべて死刑に処するという法案を提出しようとしているのがマラである。それとの関連で曾孟樸は、ここに原文には存在しないマラの名前を出したと思われる。その必要はあるのか、いささか疑問だ。シムールダンのつぶやきにマラが登場しなくても、状況は十分に理解できるだろう。

林訳はどうなっているか。

【林訳】高白曰。必生。汝以皇帝之命殺我。我以民国之義赦爾。森毛登不悅曰。此人過於慈愛。非將兵才也。64頁

「生きるのだぞ」とゴーヴァンはいった。「お前は皇帝の命をもっておれを殺そうとした。おれは共和の義によりお前をゆるしてやる」。シムールダンは、不愉快そうにいった。「慈悲深いのも度が過ぎる。兵を率いる才能がない」

林訳は細部が異なっている。だが、原文の大筋を把握しているとわかる。ところが、底本のメギー要約版は、この部分を削除した。こういう箇所があるから、林紘らは複数の英訳本を使用したと考えざるをえないのだ。

つづく「6 なおった胸、いたむ心」の冒頭を見てみよう。

Une balafre se guérit vite; mais il y avait quelque part quelqu'un de plus gravement blessé que Cimourdain. C'était la femme fusillée que le mendiant Tellmarch avait ramassée dans la grande mare de sang de la ferme d'Herbe-en-Pail.  
p.282

切傷はすぐになおったが、シムールダンよりも重い傷を負ったものが、どこかにいた。それは乞食のテルマルクがエルブ=アン=パイユの小作地の大きな血の池の中からひろいあげてきた、あの銃撃された女だった。下冊82-83頁

子ども3人の母親は、ミシェール・フレッシャールという。

【曾孟樸】薛慕丹之傷。面傷耳。治之至易。其愈也當亦甚速。今且不述。我今欲述一人其傷更重於薛慕丹。為讀者之所懸系而不忍愬然者。其人何人。蓋即戴麥客由蘭朋莊上血瀆中載歸之佻蘭宣也。6.5付

シムールダンの傷は、顔の傷だった。治すのは容易で、治癒するのもはやかった。今そのことは述べない。私はシムールダンよりも傷がもっと重いひとりについて述べたい。読者の気がかりになっていて放っておくのに忍びないものだ。その人はだれか。すなわちテルマルクがエルブ=アン=パイユの血溜まりのなかから運び出したフレッシャールである。

曾孟樸の漢訳は、意味のうえからいえばユゴーの原文をはずしてはいない。だが、「私[我]」を加える必要はあるのか(前の箇所では「吾」だった)。これを見た人々は、原作者ユゴーがにわかに登場してきて説明しはじめたと思うだろう。

こういう箇所がでてくると、原文に忠実な曾孟樸の翻訳、というあの決まり文句がふたたび私の頭をよぎる。原文にはないものを添加しても忠実ということになるだろうか。

林訳は、この箇所は章分けをしない。シムールダンが負傷してゴーヴァンの会話

を聞いたあとそのまま地の文がつづく。

【林訳】已而森毛登創愈。此時尚有一婦人。創潰未克就瘳即仏来赫。為太爾馬所救出者。64頁

シムールダンの傷はすでに癒えた。この時、傷がただれて治らないひとりの女がいた。フレッシャルである。テルマルクが助け出したものだ。

ユゴー原文に忠実ではないにしても、大筋は把握している。余分な説明も加えていない。林紓の翻訳方法では、要約の傾向が生じるのもやむをえないだろう。メギー要約版も示す。

【メギー要約版】MICHELLE FLÉCHARD, whom the beggar had picked up at the farm of Herbe-en-Pail, was even in a more dangerous condition than Tellemarch had believed. p.87

エルブ=アン=パイユの農場からその乞食がひろいあげたミシェール・フレッシャルは、テルマルクが考えるよりも危険な状態だった。

メギー要約版は、林訳とはシムールダンという人名の部分でズレがある。

どうしても子どもをさがしに行くという女に、傷が治っていないとテルマルクが引き留める。「おとなしくしていれば、あすにだって、でていかれるさ」「おとなしくするって、どういうことです？」とつづいて神の話になる。

— Avoir confiance en Dieu.

— Dieu! où m'a-t-il mis mes enfants?

Elle était comme égarée. Sa voix devint très douce. p.286

「神さまを信ずることだ」

「おお、神さま！神さまはわたしの子どもたちをどこへおやりになったんでしょう？」

彼女はきちがいになったみたいだった。声がとてもやさしくなった。下冊89頁

神の箇所を見るのは、中国人が神をどのように翻訳するのか興味があるからだ。

【曾孟樸】曰。我之熱忱。天主鑑之。曰。天主耶。彼置我兒曹於何処耶。言次神智似瞽乱。音浪乃漸涉穩和。6.6付

「わしの熱意は、神さまが見ていらっしゃる」

「神さま。神さまは私の子どもたちをどこにおやりになったんでしょう」。彼女は精神が惑乱したようだった。声は次第に穏やかになった。

「わし[我]の」と訳しておいた。ここはすこし奇妙に思える。「我」ではなかろう。前後の文脈を見れば、「わし」ではなく、女に神を信じるようにという場面だ。ちなみに前出の現代中国語訳\*18では、「つまりすべてを神さまに委ねることだ[就是把一切信託給上帝]」とある。これが妥当だ。といっても、曾孟樸訳が大きくはずれているわけではない。私は批判しているのではない。「天主」は、旧教(カトリック)の神である。

では、林訳ではどうなっているか。

【林訳】太爾馬曰。事事信託上帝。即謂之靈明。仏来赫曰。上帝今置吾子於何地。此時腦筋少乱。65-66頁

テルマルクがいう。「すべては神さまを信じることだ。それが靈験があるということなのだ」

フレッシュャールがいう。「神さまは今私の子どもをどこにおやりになっているのでしょうか」

この時、女の意識はすこし錯乱した。

発話者の名前をいちいち出している。地の文と会話部分を区別するためには、「曰」1字を使うのが従来からのやり方である。林紓らの「上帝」は、新教(プロテスタント)の神だ。ここもメギー要約版そのままではない。以下を見てもらえればわかる。

【メギー要約版】“Having confidence in God.”

Her mind seemed wandering. Her voice became very sweet. p.89

「神さまを信じることだ」

彼女の心は驚いているようだった。その声はとてもやさしくなった。

メギーはベネディクト版を要約しているから、フレッシャーのことは省略した。もとの英訳はつぎのようになっている。

【ベネディクト版】“Having confidence in God.”

“God! What has He done with my children?” 「神さま！神さまはわたしの子どもたちになにをなされたのでしょうか？」

Her mind seemed wandering. Her voice became very sweet. p.203

メギーが省略した箇所だけに日本語訳をつけておいた。林訳は、ベネディクト版を取り入れている。その結果は、フランス語原文にもとづいた曾孟樸訳とほぼ同じなのである。

曾孟樸訳第6章 「7 真理の両極」

曾孟樸訳の第6章を見よう。一方の林訳には、区切りがない。章分けをせず訳文は途切れずに続く。

ヴァンデ地方における戦いは、ヴァンデ軍の敗退が決定的だった。王党軍（曾訳は白軍。林訳は皇党）6千は、共和政府（愛国者）軍（曾訳は藍軍。林訳は民党）1千5百に反撃されて戦力を大きく消耗してしまう。

戦勝のつづく共和政府軍に複雑な状況があることが伝えられる。同一派でありながら対照的なふたりが対立しているという。寛大なゴーヴァンに対して恐怖のシムールダンだ。ユゴー原文から見ていこう。

Dans toute cette partie de la Vendée, la république avait le dessus, ceci était hors de doute; mais quelle république? Dans le triomphe qui s'ébauchait, deux formes de la république étaient en présence, la république de la terreur et la république de la clémence, l'une voulant vaincre par la rigueur et l'autre par la douceur. Laquelle prévaudrait? Ces deux formes, la forme conciliante et la forme implacable, étaient représentées par deux hommes ayant chacun son influence et

son autorité, l'un commandant militaire, l'autre délégué civil; lequel de ces deux hommes l'emporterait? pp.289-290

共和政府軍はヴァンデのこの地方全域で戦勝して、これは疑う余地がなかった。しかし、それは、どういう共和派だったろうか？そろそろ形をととのえはじめた勝利の中で、二つの共和派が出現したのだった。一つは恐怖の共和派であり、もう一つは寛大な共和派だった。いっぽうはきびしさをもって敵を征服しようとし、他方はおだやかさをもって敵にあたろうとした。いずれが相手を制するだろうか？一つは妥協的な態度をとり、一つは容赦ない態度をとっている。この二つの形は、おのおの、影響力と権威をもつ二人の男によって代表されていた。一人は軍人で指揮官であり、一人は市民で共和政府の派遣委員であった。この二人のどちらが勝つのだろうか？下冊94頁

恐怖、きびしさ、容赦ない、と3度くりかえす。それに対応して、寛大、おだやかさ、妥協的な、と反対語を同じ回数だけ示す。ユゴーの説明は、確かにくだい。それが彼の特徴だというから、そうなのだろう。

曾孟樸は、次のように漢訳している。

【曾孟樸】斯時有一至奇特之現象。出於戦勝之藍軍中。乃喧伝於扶善之道路。蓋以同治一事之兩人。而持極端反対之意見。無事不衝突。無語不抵触。同一共和主義也。一則為恐怖之共和派。一則為温醇之共和派。恐怖者惟以威力取勝。温醇者則以道理自持。兩人地位不同。而權勢相等。一為民国之委員。一為軍中之司令。6.7付

そのとき、鬨いに勝利した共和政府軍のなかに、とても不思議な現象が生じた。善をなせという道を宣伝するのである。ひとつの事に共同で当たっているふたりが、極端に反対の意見を持つのである。ことあるごとに衝突し、ことばのひとつひとつが食い違ふ。おなじ共和主義だが、ひとり恐怖の共和派であり、もうひとは温厚な共和派だ。恐怖は威力だけによって勝利を得、温厚は道理で自制する。ふたりは地位こそ異なっていたが、権力と勢力は同一である。ひとは共和政府の委員であり、ひとは軍の指揮官であった。

曾孟樸の漢訳は、ユゴーの原文から大きく離れてはいない。ほぼ忠実であるとい

っていいだろう。一方の林訳はどうか。

【林訳】皇党雖敗。而民党之見亦紛。一主殲誅。一主仁愛。二派既成。互相舐触。目前雖同以覆皇族為宗旨。然嗜殺者。日日求逞其志。即前敵之中。亦有兩党人之代表。一為高白主仁。一為森毛登主暴。67頁

王党軍は敗れたが、共和政府軍にも混乱が見られた。ひとつは皆殺しを主とし、ひとつは仁愛を主とする。互いに食い違い、王族を転覆する主旨は当面のところ同じではあっても、殺戮を好む者は毎日その志を実行しようとした。すなわち敵の前で、ふたつの代表者がいて、ひとりには仁愛を主とするゴーヴァンであり、ひとりには残酷を主とするシムールダンであった。

曾孟樸訳に比較すれば、一層の要約化をほどこしているといえることができる。しかし、大筋をはずしてはいないところにご注目いただきたい。

メギー要約版は、子どもたちを探しに出発したフレッシュャールの行動を追いかけて記述する。すなわちゴーヴァンとシムールダンの対立部分は、すべてを削除する。

ここでもくりかえす。メギー要約版では削除した部分である。それが林訳には存在している。

#### 曾孟樸訳第14章 「2 考えこむゴーヴァン」

ゴーヴァンとシムールダンは、ラントナックを追いつめた。城塞ラ・トゥーグルにおける激しい戦闘が繰り広げられる。そこには3人の子どもたちがいる。炎に包まれた子どもたちを母親が目撃する。助けをもとめて叫ぶ。いったんは城塞を脱出したラントナックが、大胆にももどってきて子どもたちを救った。彼は共和政府軍に逮捕されてしまう。ラントナックは断頭台を目前にしている。ゴーヴァンは悩むのだった。ラントナックは自分の命を犠牲にして他人を助けた。その彼をゴーヴァンは殺そうとしている。王党派の人間が子どもを助け、共和派の人間がその老人を処刑しようとしている。なんのための革命か。

Est-ce donc que la révolution avait pour but de dénaturer l'homme? Est-ce pour briser la famille, est-ce pour étouffer l'humanité, qu'elle était faite? Loin de là. C'est pour affirmer ces réalités suprêmes, et non pour les nier, que 89 avait surgi.

Renverser les bastilles, c'est délivrer l'humanité; abolir la féodalité, c'est fonder la famille. pp.434-435

すると、革命は人間を邪道におちいらせることを目的としているのだろうか？ 家族を崩壊させるため、人間性を窒息させるために、革命がおこなわれたのだろうか？ とんでもないことだ。一七九<sup>マ</sup>三<sup>マ</sup>年の革命がおこったのは、こうした家族や人間性という崇高な現実を肯定するためであって、けっして否定するためではなかったのだ。監獄<sup>バスチーユ</sup>をひっくり返すことは人間性を解放することであり、封建制度を廃止することは、家族の基礎を作ることである。下冊296頁

革命に対する疑問がゴーヴァンによって突きつけられた。なお、ユゴーの原文は、1789年である。バスチーユ襲撃がフランス革命のはじまりだからそうなる。しかし、上の日本語訳もつぎの曾孟樸訳も、なぜだか1793年とする。原本の題名が「九十三年」だから、それにあわせるのがよいという判断だろうか。

【曾孟樸】且革命之目的。果為毀棄人乎。破壊家族乎。絶滅人道乎。皆非也。九<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>三年之開幕。第一事為破巴士的獄。即恢復人道也。第二事為廢封建。即建設家族也。8.20付

革命の目的は、はたして人を破棄するためなのか。家族を破壊するためなのか。人道を絶滅させるためなのか。すべて違う。九<sup>マ</sup>十<sup>マ</sup>三年の幕開けは、バスチーユ監獄を破り第1に人道を恢復させるためであり、第2には封建を廃止するため、すなわち家族を建設するためであった。

曾孟樸訳は、原文の意味をすくい取っている。「九十三年」以外は、とつけ加える。

では、林訳はどうなっているか。革命について作者ユゴーが書いている箇所だ。従来いわれてきたのは、林紘は訳文中にしゃしゃり出てきて語句の挿入を勝手に行なっているということだった。清朝の遺臣として生きた林紘が、革命ということばに敏感であっても不思議ではない。「文学革命」に反対した林紘であるから、ゴーヴァンの苦悩を見逃すはずがない、という推測もありうるだろう。

ところが、上の引用文に該当する部分は林訳には存在しない。わずかに、その前に書かれたラントナックの犠牲的行為にむくいる共和政府軍の仕打ちを要約して漢

訳するだけだ。

【林訳】郎得那本復其自由。乃以救此三小兒之故。自拚其命。乃革命諸人。因利乘便。遽断其頭。此豈天酬英雄之意。此為民国之大辱。非丈夫所為。101-102頁

ラントナックはその自由を回復したが、あの3人の子どもを救ったがゆえに、みずからその命を捨てることになった。革命派の人々は、願ったりかなったりでその首をあわてて切ろうとしている。これが英雄に報いることなのか。これは共和の大なる恥である。男子のやることではないのだ。

林訳は、もとが要約版にもとづいている。それをさらに簡約して漢訳することもある。類似の表現があれば、それで十分だとする見方も成立するだろう。

処刑前のゴーヴァンとシムールダンの対話

悩んだゴーヴァンが実行したのは、ラントナックを逃亡させることだった。身代わりとなったゴーヴァンに対して、シムールダンは死刑を宣告する。処刑の前日、シムールダンは牢獄のゴーヴァンを訪ねた。ふたりの長い会話がはじまる。

シムールダンがいうのは、法にもとづく絶対的な共和国の建設であり、ゴーヴァンが選ぶのは理想の共和国だ。ふたりが展開する長いながい対話から、自然とふたりの対立点が明確になる。そういう書き方をユゴーは採用した。ゴーヴァンが主張するのはつぎのようなことだ。兵役の義務をなくする、貧乏人を救うのではなく貧乏をなくす、課税をしないなどなど。ゴーヴァンは説明する。

Ceci: d'abord supprimez les parasitismes; le parasitisme du prêtre, le parasitisme du juge, le parasitisme du soldat. Ensuite, tirez parti de vos richesses; vous jetez l'engrais à l'égout, jetez-le au sillon. Les trois quarts du sol sont en friche, défrichez la France, supprimez les vaines pâtures; partagez les terres communales. Que tout homme ait une terre, et que toute terre ait un homme. Vous centuplerez le produit social. p.468

つまり、まず第一に社会の寄生体を根絶することです。寄生的な僧侶、寄生的な裁判官、寄生的な軍人を除去することです。第二に、国土の自然の豊かさ

を利用することです。われわれは肥料を下水に投げこんでいますが、これを田畑にかけるのです。現在、国土の四分の三は荒地ですが、フランス全土をたがやし、共同放牧場を廃止し、共有地を分配することです。すべての人間が自分の土地をもち、すべての土地が一人の主人をもつようにすることです。そうすれば社会生産は百倍になるでしょう。（後略）下冊344-345頁

社会の寄生者を排除し、国民の全員が農業に従事すること。これがゴーヴァンの理想である。シムールダンは、もと僧侶であり、今は共和政府軍の軍人であり、ゴーヴァンに死刑を宣告した裁判官であった。ゴーヴァンのことばは、シムールダンの存在そのものを否定する。

日本語訳の「共同放牧場」は、原文では普通名詞の「ムダな牧草地」という意味だ。それらをすべての人々に分配する。シムールダンにいわせれば夢物語でしかない。

【曾孟樸】社会之貧。由社会中寄生者多也。行我術者。当首去寄生之人。如牧師。如判官。如軍人。尤寄生中之占多数者。宜悉淘汰之。然後浚溝渠。修畎畝。廢交秣之法（法文 *le Vaine Pature* 日人訳為交秣權蓋一種公家之牧場專採芻秣以供国家及貴族之用者）絶園囿之娛。盡出其地。支配公民。我法之地。蕪而不治者。都居四分之三。假令人必有一地。地必有一人。出產之富。当百倍於前。9.7付社会の貧困は、社会の寄生者が多いことが原因です。私の方法を行なうのであれば、まず寄生する者を排除しなければなりません。たとえば牧師、たとえば裁判官、たとえば軍人です。とくに寄生しているなかで多数を占める者は、ことごとく淘汰しなければなりません。その後に溝をさらい、田畑をつくるのです。まぐさ納入法（フランス語の *le Vaine Pature* は、日本人は「まぐさ納入権」と翻訳している。国家の牧場でまぐさを専門に採取し国家および貴族が使用するのに供するものをいう）を廃止し、困いをなくしてその土地をすべて人民に分配することです。わがフランスの土地は、荒れ地が4分の3を占めていますが、ひとりに必ず土地を持たせ、土地に必ずひとりを当てれば、生産は増加し以前の百倍にはなるはずで

孟樸訳では、ユゴー原文の「ムダな牧草地」がなぜかしら特定の法律名称にされ

ている。突然日本人の翻訳が注釈に挿入されているのもなにか奇妙だ。曾孟樸は、日本人の関連書を参照したらしい\*19。

【林訳】法先去兵。及無用之牧師。与審判之官司。取溝中之糞。加之田中。取荒蕪之地。分授貧民。俾每人咸得田而耕。113頁

フランスはまず兵を、そして無用の牧師および裁判官を取り除きます。溝の肥やしを畑に撒くのです。荒れ地を貧民に分配し全員が畑を得て耕すようにさせます。

林訳は、もともと逐語訳にはならない。しかし、原文の意図するところは伝えている。

もうひとつだけ、男女平等についてのべる箇所を見る。

Cimourdain répondit:

- Ce qu'elle est. La servante de l'homme.
- Oui. A une condition.
- Laquelle?
- C'est que l'homme sera le serviteur de la femme.
- Y penses-tu? s'écria Cimourdain, l'homme serviteur! jamais. L'homme est maître. Je n'admets qu'une royauté, celle du foyer. L'homme chez lui est roi.
- Oui. A une condition.
- Laquelle?
- C'est que la femme y sera reine.
- C'est-à-dire que tu veux pour l'homme et pour la femme...
- L'égalité. p.469

シムールダンが答えた。

「女性は現在とかわらんね。男性の召使だ」

「そうですね。しかし一つの条件づきで」

「どういう条件かね？」

「男性も女性の召使になるという条件です」

「君はそう思っているのか？」と、シムールダンは叫んだ。「男が召使にな

るんだって！それはだめだ。男は主人だ。わたしは、家庭という王政しか認めん。家庭における男は王だ」

「そうです。でも、一つ条件があります」

「どういう？」

「女性が家庭の女王になるという条件です」

「つまり、君が男と女に望んでいるものは……」

「平等ということです」下冊345-346頁

男女平等は、家庭における「国王 roi」に対して「女王 reine」を使用して表現する。後者は、「マルゴ王妃 [馬哥王后佚史]」に見る王妃 [王后] にほかならない。曾孟樸と林紓は、それをどう漢訳したか。

曾孟樸訳の会話部分には「曰」を使っていることは指摘した。日本語訳は改行してカッコを使う。

【曾孟樸】薛慕丹曰。男子之婢也。曰。然第有一約。曰。何約。男子亦女子之僕耳。曰。汝欲男子為僕乎。我謂男子乃永為主人。我平生僅主張一種王權。即家族之王權。男子之在家。其尊固牟王也。曰。我亦贊成。第亦有一約。曰。何約。曰。女子之在家。其尊当牟后耳。曰。如汝言男女当為……。曰。然。平等。同上

シムールダンは言った。

「男性の召使いだ」

「しかし、条件がひとつだけあります」

「どういう条件かね」

「男性もまた女性の召使いです」

「男性を召使いにさせたいのか。私は男性こそが永遠に主人だというのだ。私は、ある王権、すなわち家族の王権だけを主張している。男性は家にあつて、その尊さはもとより王であるからだ」

「私もそれに賛成です。また条件がひとつだけあります」

「どういう条件か」

「女性は家にあつて、その尊さは皇后であらねばなりません」

「すると君がいうのは男女がともに……」

「そうです。平等です」

孟樸の翻訳は、ユゴーの原文に忠実だ。漢語「王」に対して「后」、つまり日本語では皇后を配置した。では、林訳はどうか。台詞には、同じくカッコを使用する。

【林訳】森毛登曰。女者男之僕。高白曰。僕之可也。公理言之男亦宜為女子之僕。森毛登呼曰。安有是事。男子為一家之帝。高白曰。男既為帝。女不当為后耶。森毛登曰。男女万万不能同等。高白曰。等固不同。以平等之心待之。則同耳。114頁

シムールダンは言った。

「女性は男の召使いだ」

「召使いでかまいません。公理からいえば男もまた女の召使いです」

「どうしてそのようなことがあるのか。男は一家の皇帝なのだ」

「男は皇帝ですから、女は皇后になってはならないのですか」

「男女は決して同等にはなることはできない」

「等しいというのは、もとより同じだということではありません。平等の心をもって接すれば、それは同じことなのです」

林訳もまたユゴー原文からそれほど隔たっているというわけではない。林紓は漢語「帝」と「后」を使用した。

すこしの補足をする。漢語の「僕」は召使いの意味で男女共に使われる。「男僕」あるいは「女僕」という組み合わせだ。それでかまわない。しかし、女の召使いには「婢」ということばがある。曾孟樸は、それを利用して翻訳した。ここは、林紓が同様の工夫をしてもよかった箇所だ。といって、私は林訳を非難しているのではない。

上記についてメギー要約版には、該当する部分は省略されている。

## 結 論

以上、大デュマ「王妃マルゴ」とユゴー「九十三年」の2作品について、曾孟樸の翻訳を検討した。

ふりかえる。時萌、郭延礼らは、曾孟樸の翻訳についてどのように説明したか。

原著に忠実でしかもわかりやすい直訳であるかのように書いていた。白話による翻訳が曾孟樸の主張であるのは確かだ。しかし、孟樸の主張が彼の翻訳でそのまま実現されたかどうかは、また別の問題になる。

主張と実践が一致してこそ、曾孟樸のことは正しいといえる。しかし、白話による翻訳を主張しながら、文言を使用した作品も公表しているのが事実だ。そこに曾孟樸の言行不一致が見られることは、以上の点検によってあきらかだろう。

曾孟樸の翻訳に関する言説は、林訳を批判するばかりの根拠のひとつにされる(注8参照)。

曾孟樸が林紘に会見して白話訳を勧め断われた、という例の出来事が思い出される。孟樸は、林紘が外国語を理解しなかった、外国文学についての知識もなかったことを忘れずに書く。ここには、林紘とその翻訳に対する曾孟樸の評価がおのずとあらわれている。ほめてはいない。

孟樸訳は原文に忠実であったにもかかわらず、一方の林訳はそうではない。この評価がでてくる背景には、林紘が孟樸の提案を拒絶した事実が存在する。曾孟樸を中心にすると、林訳に対する評価はどうしても負の方向に傾く。

しかし、その根拠になるはずの孟樸訳が、原文にそれほど忠実とはいえない。こうなると、曾孟樸の文章を林紘批判に援用するのは不適切だ。事実がそれを証明している。

林訳をおとしめ、曾訳をほめることは妥当ではない。

林訳は「歪訳」だと罵る研究者は、曾孟樸の翻訳についても程度の差はあっても同じ結論になるはずだ。孟樸訳が原文に忠実でありすばらしいというのであれば、林訳も同様でなければならない。それでこそ人を納得させる公平な評価といえることができる。



#### 【注】

15) ここも「血婚哀史」についてとほぼ同じ説明になる。前出韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』の319頁に注記がある。「樽本書目は『二十世紀中国文学大典』にもとづき1912-4-13 - 1912-6-14と記録し、開始と終了の時期は不明であると説明している」。だが、こちらも参照の順序が逆なのだ。私の手元にある実物がその日付だから、目録初版において「開始と終了は不

明」と説明した。『大典』が同じ日付になっているのは、やはり目録初版を引用したと思われる。『清末民初小説目録』第4版では、以下のように注釈をつけた。「(本目録初版)『時報』1912.4.13-6.14。上記の連載時期は、その一部分で、開始と終了は不明[大典241]が「『時報』(1912.4.13-6.14)」とするのは本目録初版にもとづく[韓08-92][韓08-319]1912年2月起連載，至9月14日完。

『時報』1911年11月7日未署名「革命小説九十三年事迹撮要」[韓08-361][劉晩154]1912.2.21開始登載該小説」。羽田朝子氏よりご教示があった。

- 16) 時萌『曾樸研究』では、旧訳を修訂して単行本で刊行したのは1929年だとしている。52-53頁、116頁。また、郭延礼は、『時報』連載を1913年と誤る(郭延礼「雨果作品在近代中国的傳播」『文学經典的翻譯与解讀 西方先哲的文化之旅』濟南・山東教育出版社2007.9。79頁)。
- 17) 雨果著、鄭永慧訳『九三年』北京・人民文学出版社1957.5 / 1978.4吉林第1次印刷。また、同社1992.6北京第6次印刷。15頁
- 18) 雨果著、鄭永慧訳『九三年』264頁
- 19) 韓一宇『清末民初漢訳法国文学研究(1897-1916)』の91-105頁は「九十三年」をあつかっている。101頁の注において、孟樸は「九十三年」の日本語訳本を参照したと説明する。曾孟樸がほどこしたこの注記にたぶんもとづいているのだろう。ただし、訳者、出版社などについては説明がない。

(たるもと てるお)